

夢の原型から集合的無意識までを

記述する人

田村のり子第七詩集『時間の矢——夢百八夜』

に寄せて

鈴木比佐雄

1

田村のり子さんは、夢の詩を詩誌「山陰詩人」に書き続けてきた。その夢の詩だけをまとめた第七詩集『時間の矢——夢百八夜』が刊行された。田村さんとは、長年詩誌や詩集、評論集を交換していて初期のもの以外は拝読させて頂いた。また交流が始まる以前にも私は古本屋で田村さんが一九七二年に刊行した『出雲石見地方詩史五十年』（木犀書房）を八十年代後半に見つけて購入し拝読して、その詩文学の歴史を書き上げた

田村さんに敬意を抱いていた。膨大な島根の詩人たちの資料を読みこなし、鋭敏な批評精神と深い愛情を込めて、その詩人の表情や詩誌の志の連なりである歴史を平明な文体で書き記していたのだ。これ程の詩史が書けるエネルギーに満ちた詩人は滅多にいないので、島根の詩人たちはとても幸せだと思われた。その時に真っ先に頭に思い浮かんだことは、田村さんが宮崎の金丸榊一の『宮崎の詩・戦後編（上）（下）』二冊と黒田達也の『西日本戦後詩史』といったその地方の詩史を徹底的に書き込んだ優れた詩人たちと同じタイプの詩人であるとの認識だった。ただ二人と違うことは二人が戦後から書き記しているのに、田村さんは、口語自由詩の黎明期の一九一八年（大正七年）発行の詩誌から島根の詩史を始めていることだった。

そのA5判四〇〇頁もの『出雲石見地方詩史

だろう。

五十年』をベースにしながらその後の島根の詩史を加筆した『島根の詩人たち』（発行／島根県詩人連合）は一九九八年に刊行された。第一項でそれ以前の詩の先駆者として浅原才一のことも前回同様に紹介している。浅原才一は「六千数百を数える阿弥陀仏讃歌がある」という。実は私が学生時代から愛読している鈴木大拙の名著『日本的靈性』の「第四篇 妙好人」では、四十頁以上を費やして浅原才一の情熱的な「阿弥陀仏讃歌」を「日本的靈性」の徹底した実践者として論じられ高く評価されている。しかし田村さんが浅原才一を島根の詩人の出発点にしないのは、独白のような表現ではなく、他者に発信しているという表現者としての自覚を口語自由詩の原点に置いているから

田村さんは、今まで六冊の詩集『崖のある風景』、『不等号』、『もりのえほん』、『ヘルンさん』（詩と写真）、『連作詩——竹島』、『幼年譜』を出している。第一詩集『崖のある風景』は一九七〇年に刊行された。序文を安部宙之介が書いている。安部宙之介は田村さんの才能を詩作だけでなく評論の才能も発見し『出雲石見地方詩史五十年』の執筆を勧め、膨大な資料を貸し与えたという。このよきな人物がいたからこそ田村さんの才能も開花したのだと考えられる。安部宙之介の序文の一部を少し長い引用したい。序文というよりも優れた田村のり子の詩人論になっており、田村さんのこれ程の理解者はこれからも決して現れることはないだろう。

「青い瑪瑙を思わせる詩人である。姿も美しいが、詩も美しい。その詩は冴えた輝きと高いひびきを持つ。そして、やさしく誰のころこにも入って行こうとする。純情で清新で、炎える魂から生まれたものである。／思いがけないとき、足元に断崖が現れる。その下は虚無の暗黒である。言いようのない淋しさがある。詩人・

田村のり子は、そのような崖のある風景の中に幾度か立たされた。幼いころ、父と母を亡くし、更に妹を喪った。甘え切ることのできなかつた魂は、悲しみの尾を曳いた。しかし、恵まれた結婚をして、愛に生きる日が来た。十数年が夢のように去ったころ、突然に夫の急逝であった。落葉が樹を離れるときの、さりげなさの別

れでなかった。全く不運の新しい断崖に立たされたのだった。痛みはまだ生々しい。／彼女は、自己を見つめ、自己をとおして人生や詩を把握した。悲しみに碎かれないで立ち上り、そして、強く歩いた。その崖のある風景を、虔ましく突き離して歩いた。そして、現実といのちの接点に立って、詩の繭をつくった。美の構築をなした。知性に支えられた抒情のきびしいほどの制作をした。」

田村さんの第一詩集『崖のある風景』には五十篇が収録されている。その一章の十四篇は失われた家族との対話や二人の子供に触れた詩篇だった。その中に「思い出」という詩があるので引用してみたい。

珠

それがあなたの思い出

あなたは日曰 何を娘に語ったでしょう

どんな言葉 そんな出雲訛りで

わたしは 何をあなたに告げたでしょうか

そんな言葉 どんな片ことで

ひとことでもそれが思い出せたら！

思い出

六歳のとき死別した母によせるうた

雲なら秋口のいわし雲

色なら ゆつくりと舞う褐いろの落葉

匂いなら 五月の青いひなた

重さなら リラの花房

かそけさなら 忘勿草の薄紫

神秘さなら ホタルイカの第四の足

かなしさなら ものいわぬけものの眼

明るさなら 黄昏どきのレンギョウの花

懐しさなら 空に吸われて行く五色の風船

もどかしさなら 明けがたの夢

透明さなら 親のない子の手首に光る数珠の

この詩「思い出」は六歳で死別した母の思い出がないという逆説から成り立っている詩だ。故郷の色彩豊かな自然の光景が次々に現れてくるが、自分を生んでくれた母の存在が影のように立ち現れてくる。透明な「数珠の珠」のような存在としか思われない母に対して、それでも田村さんはあ

りつたけの感謝を込めてこの詩を書いたのだと思われる。私はこの詩を読むと田村さんは母のいない子で孤独ではあったが、眼に見えない母の愛を感じてその愛を信ずることができた子であったと感じる。この詩集を出したのは四十歳で、すでに二児の母であった田村さんは、眼に見えない母の愛を子に伝えようと生きておられたのだろう。

第一詩集第二章十三篇は、田村さんの個性的自我を前面に出した詩篇だった。三章十二篇は、日常の家族との在り様を笑い飛ばすようなユーモアのある詩篇や夢の詩篇もあった。四章十一篇は、急逝した夫への鎮魂詩篇だった。そのような意味で田村さんの全体像が現れていてその後の原点となった詩集だったろう。因みに四章冒頭の詩「通夜慟哭」は、詩集の解説を書いてくれた木原孝

一が、「婦人画報」にも解説付きで紹介してくれ、当時大きな反響があったということだ。

2

人はなぜ不思議な夢を見るのか。夢と無意識とはどんな関係にあるのか。そのような問いに答えようとしたのがジグムント・フロイトだった。その動機は神経症（ノイローゼ）の患者の内面を理解し治療に活かすために夢の分析を試みたことだった。フロイトは後に精神科医として臨床の中から精神分析の理論と方法を確立して後世に大きな影響を与えた。またフロイトの夢の分析は、詩人のブルトンや画家のダリなどにも影響を与え、シュールリアリズム運動を生み出すほどの衝撃があった。フロイトの方法はそのような臨床経験か

ら生み出した〈精神分析〉であったが、後に精神病理学や深層（実意識）心理学として発展し、それらが二十世紀の世界の思想・哲学・文学・芸術に影響を与えていった。フロイトは人間の心を意識、前意識（意識化可能な心的内容）、無意識（意識化できない心的内容）の三層に分けた。さらに心を構造的な観点から自我、エス（快樂原則に従う欲動的なもの）、超自我（自我を監視する道徳的な良心や検閲）の三つの心的な組織を構想した。そして超自我という心を成立させることと、エディプス・コンプレックス（父親を殺し母を独占したいという心の働きへの罪悪感）との根深い関連を考察していく。以上フロイトの基本的な考え方を紹介したのは、田村さんの夢の詩を読む際の参考になるだろうと思われるからだ。

田村さんの第二詩集『不等号』は第一詩集とつながりを感じさせてその展開であることを理解でき、その時代に田村さんにとって切実な事柄に誠実に対峙して自らの実存を分析しながら書かれた詩篇だった。ところが第三詩集『もりのえほん』、第四詩集『ヘルンさん』、第五詩集『連作詩——竹島』、第六詩集『幼年譜』などの四詩集は一つのテーマ性を持って連作的に意識的に書かれたもののように思われる。その意味では今回の第七詩集『時間の矢』も田村さんは夢の詩の連作を意識的に書き続けてきたのだ。詩集タイトルになった詩「時間の矢」を読んでみたい。

時間の矢

幌ぼろのあるトラックにギユウ詰め立っている子供たち。どこへ向けての出発か。見上げ

ていると六歳くらいの子が話しかけてきた

「お母さんは僕が十三のとき七つで死んじゃった」「えっ？ 君はまだ十三になってない

それに七歳の母だなんて聞いたことない」でもそうなんだ……と子供は悲しげに言い張る

きつと真実なんだろう。この世は矛盾に満ちていて、何ひとつ合理的ではない。それにヒトの子の時間の矢にも方違かたががえというものはある。とだんだん信じられてくる。うん

この詩を読んだ時にまず感じることは、常識的な時空間を飛び越えて、不可思議な夢の世界が真

実であるという思いが読み手に広がっていくことだ。田村さんの夢の記述は、登場人物の「六歳くらいの子」と記述者である田村さんが不思議な対話を交わしながら、ひとつの確固とした「夢の論理」で夢劇場を創り上げてしまっていることだ。

この詩の前提には時間の矢は、平安時代の陰陽道の禁忌の方角を避けるために「方違え」をしたように、真直ぐに進むことなく危ない場所を回避して進んでいるのではないかと語られている。人間にはその人間に相応しい時間が流れていてその流れに生きることしかないとも暗示させてくれる。

「六歳くらいの十三歳の子」が「七歳の母」の死を見送る。このようなことが真実であるのが夢の世界であることをまず宣言しているのだろう。このような「七歳の心を持った母」を亡くしてど

こかの町へ連れて行かれる「十三の心を持った六歳の子」の悲しみが、六歳で母を亡くした田村さんの夢の中に出現することは理解できる。人がどんなに変貌していても幼児・子供時代の体験は無意識の中に残っていて、超自我の抑圧が無くなれば想像を絶する形で露出される。田村さんの夢の詩は、見た夢に創作的な技巧を加えないで、その夢の原型をそのまま記述することに徹している。その意味で読み手は、田村さんという患者の夢を聞き読み取る夢判断の治療者としての位置におかれるだろう。しかし田村さんという患者は、父というエディプス・コンプレックスの存在を持ちあわせていないようであり、母という存在も影のよ

うなまだ見ぬ存在なのであり、フロイトの夢判断では解釈や分析は難しいように思われる。なぜな

ら田村さん自身が子と父母とに分離して家族間の夢の劇を演じているような多重人格的な意識構造になっている思いがしてくる。その意味では田村さんの夢の詩は、患者としての報告書というよりも、治療者を驚かす人間の深層の連なりを自在に転移していく試みだろう。田村さんには患者であるという苦悩や悲壮感が微塵もなく、超自我の抑圧が少なくなることをどこか楽しんでるような気がする。そうでなければ一〇八篇もの夢の連作を書き記すことはできなかったろう。読者は田村さんの深層の奇想、天外な展開を楽しみ面白がり、読者の超自我の窮屈さを解き放ってくれる爽快さを感じる事ができるだろう。

それから一章の中で特筆すべきことは、亡くなった夫の三郎さんが繰り返し現れることだ。夫

が死んでしまったことは嘘だったのではないかと思ひ、夫の姿を垣間見たり、夫の存在の影を感じてしまふ光景を夢見て、その影と無言の対話をしてしまふのだ。最も心に残つた『鳥浄土・雪浄土』を引用してみる。

鳥浄土・雪浄土

わが家に近づくと 屋の棟に二十羽ほどの鳩の群れが思い思いに舞い遊んでいる 夕焼けの逆光に照らされて世にも楽しげな眺め 目を移せばお隣の上空にも沢山のトンビの群れが これも思い思いに輪を描いて舞い旋り 夕べの金色に光りこの世ならぬ神々しさ 更に少しく遠く目を放つと そこら中の屋の

棟には 無数のころろ大きなインコの群れが思い思いに羽ばたき コバルトや黄の色が限りなく高い空に映え 夢かと見紛うわが上空は極彩色の鳥景色 音なき鳥浄土である

そうだ 我に帰つた私はコンサートの待合わせを思い出した 早く着替えて出掛けなくてはと家の裏手へと回る と雪の庭に三郎さんがしょんぼり立っていた いつものスーツ姿で 何とも言い知れぬ安堵感に満たされて私は思うのだ 何を勘違いしていたんだろう 三郎さんはもう死んでしまっただなんて

——まだいたんだ その姿が消えてしまわないようにそつと横に並んで雪庭から家を眺める 建てつけが歪んでいて一条の光が建具の隙間から射す 雪景色の中なんと小さな家

ですこと！ 雪国の童子らの拵えて遊ぶというカマクラのように私たちは あんな所に小さな明かりを灯してくらして……

このように夢見てしまった光景は、解釈や解説を寄せ付けないほど美しい。この世では果たせなかつた再会の思ひを夢の中で実現してしまうことがある。「まだいたんだ」という呟きは、田村さんの深層から湧きあがってくる固有の夫婦愛の心象風景となつて、小さな家の小さな明かりを灯し続けるのだ。

一章の重厚さとは対照的に二章「猫の尻尾」では、猫などのミステリアスな小動物などを偏愛しこたわることによって、なぜかそれに癒されて変容していく人間存在を記述している。三章「紺屋

の店先」は、慣れ親しんだ郷土の商店、自然、動物たちなども位置や関係や存在が変容していることに驚き、それを記述している。四章「人台」は人間存在そのものや他者との関係性が変容していく恐ろしさや怖いもの見たさを記述している。「あたま山」などは、腕の穴にサクランボの種が落ちて桜の大木になるといふ想像力を刺激する詩になつている。五章「人形」は、物たちもいつの間にか変容し、また物の物魂が見えてくる風景を記述している。六章「風葬」は天空、水中、垂直の想像力が生み出した夢の記述だ。「わだつみの軍団」などは、人類の戦争の悲劇を案じていて、ユングの集合的無意識と重なるところがある。七章「不思議の絨毯の上」は旅や水平移動の想像力が際立つた詩篇だ。田村さんの夢の詩集は、田村

さん個人の精神ではあるが、人間の無意識、集合的無意識である深層のいまだ知られることのない世界を一〇八篇も垣間見せてくれる。夢を見る人はもちろんだが、夢を見ない人にも読んでもらい、不安、いらだち、絶望を抱えながらも人間の心や精神の豊かさを信じている人に読んで欲しいと願っている。最後に詩「あたま山」を引用したい。落語「あたま山」の記憶が無意識の中から想起されて、このような新たな発想の展開ができる田村さんの夢の詩は、肉体を通して人間の意識を解放させ、想像力に昇華できる可能性を示している。多くの未知の読者にも詩に記述された夢の楽しみを知って欲しいと秘かに思っている。

「あたま山」

右の二の腕の内側に小さな穴があいているのを発見した 直径五ミリ・深さ五ミリばかりの穴である 皮膚のまま陥没し 虫眼鏡でよくみると穴底は 直径五ミリの鍋底に直径四ミリの落とし蓋がかぶさっているような具合 みんな珍しそうに覗き込む 私は誰にでも無料で虫眼鏡を貸し出して 見学を許可する 何かの拍子にここへサクランボの種が落ちて やがて桜木に成長したら 人々が莫塵を敷いて花見の宴をする あんまり喧しかったら落語「あたま山」に倣って桜は引っこ抜こう 掘り跡に池ができて私も私は入水なんかしないだろうな と好い気味に見物の行列をみている

田村のり子詩集『時間の矢——夢百八夜』栞解説文
鈴木比佐雄

コールサツク社 2011